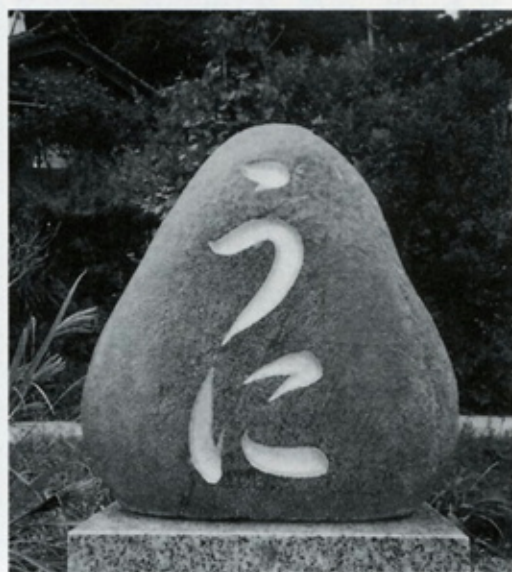




▲冠石出合いの海岸正面に六連島が見える、右は上田玲子さん（うに基本舗専務）

合せる顕彰碑の全体形を考えていたのである。だがどう見ても自然石はローソクのふつくらとした炎の形に見えることから、これを「冠石」のモチーフにして、揮毫石は花崗岩（徳山市黒髪島の斑状黒雲母花崗岩）の窩石計らいで細長いものとし、台座石を山口県の万倉石（石英閃緑岩）にした。そして地面から見掛りのみ自然の肌を現わす組み立てによって、一見してローソクに火を点した様な、総高一メートルぐらいの碑の形を企画したのである。

思うに、六連島の西教寺九世蓬山院家の思いつきによって、城戸久七翁がいろいろ苦心し、うにのアルコール漬けを編み出した。それが元でうにの業界に火を点したこの意味合いにも繁っていることに思い至ったとき、冠石との出合いと共に、我が師匠ではない霊



▲冠石

威によるものであったかと感じたのである。

さて、碑の構想も決まったことなので、西教寺境内の建立場所など第十二世西村真詮院家と話し合うため上田様に案内していただき寺を訪れた。そしてご親切なご指導によって、碑石建立位置を定めたのである。

ここで島で唯一の寺、西教寺（浄土真宗）にまつわること、蓬山院家から上田甚五郎に至る加工うにに関しての伝承について紹介しておこう。

享保元年（一八〇一年）この島で大森岩松の次女として生まれた「お軽」という女性が、この寺のご縁によって信仰心を持ち、後に加賀の千代・大和の清九郎・長門のお軽と言う、三人が真宗の全国の同行（信者）から慕われたことで、それを称える「お軽同行之碑」が寺の境内に建立され、また、お軽のことを詠んだ仙崖和尚の歌碑もお軽の碑左横に建てられている。

ところで、この寺の第九世蓬山院家（一八二一〜一八九二）がアルコール漬けのうに加工の考案者であり、島一番のうにの業者城戸久七が加工の祖と言うことは先にも述べた通りであるが、この二人に関しては、上田玲子様 の山口新聞掲載記に、次のように述べられている。

—明治初期、英国人が灯台守として島に住。灯台設置に伴い外国船の出入が増加し始